

イギリス小説に描かれた女性の手仕事 —*Vanity Fair, Adam Bede,* *Middlemarch, The Mill on the Floss*

香 川 由紀子

1. はじめに

「衣」にまつわる手仕事は、何千年もの間あらゆる階級の女性に課されてきた。西欧においては、衣服を調える最初の工程である糸紡ぎがギリシア、ローマの神話に既に「妻の携わるべき仕事、しかも唯一の仕事」として現れている（前野・香川 19-24）。時を経て近代に入ってから糸紡ぎや機織りは娘たちの重要な仕事とされたが、工業化が進みそれらが家庭内での仕事でなくなると、次にはその先の工程である縫物、編物、刺繍といった「衣」を扱う手仕事女性が女性たちにとって身につけなくてはならない仕事となってゆく。

手仕事はなぜ女性の仕事として位置づけられてきたのか。端的に言えば、手仕事は「女性らしさ」をしつける手段として最適だったからである。大人しく座って正しい姿勢を保ち、口をつぐんで仕事に没頭する。仕事に没頭すれば、愚かな考え—〈貞節〉を脅かすような—に陥ることもない。こうした考えによって、幼いうちから女性たちに課されてきたのである。

衣料生産に関わる仕事について性役割が後から意味づけされたと見られるケースもあるが、少なくとも家庭内における手仕事がモラルと共に女性に担わされてきたのは事実である¹。それは手仕事をする女性の姿が、絵画や小説にも多く描かれてきたことから明白だろう。これらの描写からは、モラルの内容が時代によって、また手仕事の種類によって変化する様子と共に、女性自身がどのような思いを込めて手仕事に向き合っていたかをも読み取ることができる。とりわけ工業化が進み消費文化が発達した近代においては、女

性の性役割が明確になり、手仕事の姿の背景に浮かび上がるモラルにも女性の心情にも特徴が見られる。本稿では 19 世紀の小説に描かれる女性の手仕事の情景を手掛かりに、近代西欧の女性のモラルがいかなるものであったのかを今一度見直してみたい。

2. 〈貞節〉と〈勤勉〉の象徴

西欧においてモラルの基盤となるのはキリスト教であるが、聖書はあるべき女性の姿を手仕事に絡めて語っている。旧約聖書の箴言第三章には、「賢い妻」の行いが以下のように列挙される。

彼女は生きながらえている間、その夫のために良いことをして、悪いことをしない。(十二)

彼女は羊の毛や亜麻を求めて、手ずから望みのように、それを仕上げる。(十三)

彼女は手を糸取り棒にのべ、その手に、つむを持ち、(十九)

手を貧しい者に開き、乏しい人に手をさしのべる。(二十)

彼女は亜麻布の着物をつくって、それを売り、帯をつくって商人に渡す。(二四)

彼女は家の事をよくかえりみ、怠りのかてを食べることをしない。(二七)

「夫のために良いことをして、悪いことをしない」妻の資質に〈貞節〉が含まれていることは言うまでもないだろう。箴言に書かれる貞淑な賢い妻は、^{つむ} 錘を持ち、着物を作って、怠惰でいることはない。

聖書の中のこの章に言及し女子のしつけにおける手仕事の重要性を示したのは、17 世紀に大貴族の一族として生まれ、カトリックの教義にもとづく教育に力を注いだフェヌロンである。フェヌロンの『女子教育論』によれば、女性は持って生まれた好奇心のために多言、軽薄となり、沈思黙考ができな

い(16)。そのため女性に対しては、子どもの頃から、「あまりに興奮してきたら鎮めてや」り、「気を散らせ、あまりに情熱を高める遊び、あるいは、女の子として慎しみのない身体の動きになれさせるような遊び、家からひんぱんに外出すること、そして、家からしばしば外出したい、という強いぞみを起こさせるかもしれない会話」を避けるようにして教育しなければならないと述べる(42)。さらに、女性は「柔弱な精神」と「せんさく好きの精神」を持つがゆえに知恵や力を必要とする仕事には適さないが、その埋めあわせとして家庭内で静かに仕事をするための「器用さ」、「清潔さ」、「儉約さ」を与えられたとも述べる(10)。「器用さ」は無論、女性の手仕事の義務と結び付けられている。つまり、女性を家に囲い込み、愚かな考えを追い払うために、「器用さ」という特性を活かして静かに手仕事をするよう仕向けられているのである。

こうした手仕事への没頭が女たちの「愚かな考え」を制するとする固定観念は、16世紀の人文主義者ヴィーヴェス(Vives)の言葉に既に典型的に表れていた。彼は *The Education of a Christian Woman* (1524) の中で次のように書いている。

I should not wish any woman to be ignorant of the skills of working with the hands, not even a princess or a queen. What could she do better than this when free of all the household tasks? She will converse with men, I suppose, or other women. About what? Is she to talk to forever? Will she never keep quiet? Perhaps she will think. About what? A woman's thoughts are swift and generally unsettled, roving without direction, and I know not where her instability will lead her. (60)

ヴィーヴェスによれば、女性のおしゃべりもまた罪悪である。口をつぐませ余計な考えを持たせないためには、手を動かし仕事に没頭させることが有効

なのである。

近代に入ると、女性の手仕事は機具を使用する糸紡ぎや機織りに替わって簡易な縫物や編物が一般的になると共に、刺繍やレース編みといった手芸が加えられた。後述するが、これには中産階級の台頭と消費文化の発達が深く関わっており、手仕事の種類の変化に伴ってそこに付されるモラルも異なる様相を帯びてくる。しかし、手仕事が〈貞節〉を保証するという考え方は保持されている。19世紀イギリス小説に描かれる女たちの多くは縫物を手にしているが、その多くが良き妻、良き母の象徴として描かれる。例えばイギリスの中上流社会の人間模様を揶揄したサッカレー (Thackeray) の小説 *Vanity Fair* (1847) において、縫物はアミーリア (Amelia) の貞淑な妻ぶりを表している。

アミーリアは夫亡き後も夫だけを慕い続けている。夫への〈貞節〉は忘れ形見の息子にのみ深い愛情を注ぐことで示される。経済的事情からその一人息子ジョージ (George) を義父のもとへ送ることを決心した時、アミーリアはジョージにサムエル記を読ませる。

Then he read how Samuel's mother made him a little coat, and brought it to him from year to year when she came up to offer the yearly sacrifice. And then, in her sweet simple way, George's mother made commentaries to the boy upon this affectiong story. How Hannah, though she loved her son so much, yet gave him up because of her vow. And how she must always have thought of him as she sat at home, far away, making the little coat: (479)

アミーリアは聖書サムエル記に書かれるハンナが息子のために上着を縫う姿を自分に重ね合わせ、今や祖父のもとで裕福に暮らし高価な物を身に着けているジョージに丁寧にへり縫いをしたシャツを作ってやる (542)。彼女にとって上着を縫うことは母の愛を一針一針縫い込めることであり、その姿は

夫亡き後も他の男性には目もくれないで子どもに深い愛情を注ぐ良き母の象徴となる。彼女の裁縫箱 (work-box) が息子の小画像の下に聖書や祈祷書と並べて置かれている (659) こともまた、「縫う」という行為に神聖さを与え、夫への〈貞節〉を強調していると言えよう。

〈貞節〉はキリスト教において女性に最も厳しく説かれたことであったが、先の箴言に「怠りのかてを食べることをしない」(二七) とあるように、勤勉さもまた女性が備えていなければならない資質であった。閑暇を「おそれ軽べつしなければならぬ」(フェヌロン 123-124) いものとする意識は、女性に限らず求められたものであり、宗教改革を経てプロテスタントにより色濃く受け継がれている。カルヴァン主義、ピューリタニズムは、禁欲を重んじ、労働を〈天職〉と考えて励むべきであると説き、神の恩恵を得られるものは決められているという〈予定説〉を唱える。周知のように、こうした教義を熱心を守ろうとすることが勤労意欲を掻き立てることとなり、近代の資本主義の発展を促進したと述べたのはマックス・ウェーバー (Max Weber) である。ウェーバーは、以下のように述べる。

[...] on earth man must, to be certain of his state of grace, “do the works of him who sent him, as long as it is yet day”. Not leisure and enjoyment, but only activity serves to increase the glory of God, according to the definite manifestations of His Will. (157)

この意識をエートスとして勤労に励んだのは中産階級の人々であった。加えて、女性にとっては〈愚かな考え〉に陥る暇もないほどの勤勉さが〈貞節〉と同意となるため、勤労モラルは二重の意味で重視されたと言えるだろう。勤勉さを最も象徴する手仕事は、効率的で実用性の高い編物である。これは、ジョージ・エリオット (George Eliot) 著 *Adam Bede* (1859) におけるポイザー夫人 (Mrs Poyser) に典型的に見られる。彼女は編物が一番好きだと言うが、その理由は “she could carry it on automatically as she walked to

and fro.” (72) と記される。彼女は家を管理し農場経営に采配を振るい、その合間にも手は休むことがない。イヴ・K・セジウィックは「ポイザー夫人が管理する農産物や織物には、商業用と家庭用といった明確な区別がない。(中略) ポイザー農場は家庭と労働の場は物理的に区別されえないばかりか、それぞれの生産・消費様式もほぼ似たかたちで構造化されており、それゆえほぼ同じ価値が与えられている」(210) と指摘するが、このことは彼女には相当な労働量が求められると同時に、作り出すものには常に実用性が求められていることを示す。とすれば、一針ずつ着物に思いを縫い込めるより、どこへでも持ちこんで家人に目を光らせつつ、機械的に手を動かしてウーステッドの靴下を編みあげていく方が、ポイザー夫人の手仕事としては理に適うのである。

ポイザー夫人とは対照的にリズベス・ビード (Lisbeth Bede) は、家庭や労働の場を管理する有能さを持ち合わせない。

[...] at once patient and complaining, self-renouncing and exacting, brooding the livelong day over what happened yesterday, and what is likely to happen to-morrow, and crying very readily both at the good and the evil. (41-42)

リズベスは自分では主婦の仕事——食事や衣類を用意し安らぎの家庭を作る——をこなしていると信じており、それは時に家族をうんざりさせる。そんな彼女も常に編物の手を動かしており、家族に邪険にされた時さえ編物を持って泣く (41)。大工の母である彼女には、家計を助けるという意味において手仕事は実用性の高いものである必要があったと言えるだろう。そしてその実用性を自覚しているかも疑わしい、才覚のないリズベスのような女性にも編物は勤労モラルとして身に染み込んでおり、無意識に行われる仕草 (knitting rapidly and unconsciously) (38) となっているのである。

3. 手仕事の外観

ウェーバーは人々の営利追求が快樂主義ではなく神の恩恵を確かなものにしようとする精神からうまれたことを主張するが、しかしまたこうした熱心な宗教モラルの実践が却って〈勤勉さ〉という外観だけを重視し宗教的意味を脱色してしまう可能性も認めている。彼はフランクリン (Benjamin Franklin) の訓戒に言及して “the appearance of honesty serves the same purpose, that would suffice, and an unnecessary surplus of this virtue would evidently appear to Franklin’s eyes as unproductive waste.” (52) と述べている。そしてこのような外観のみによって効果を期待するようになる現象は、女性の手仕事のあり方にも合致している。手仕事は〈貞節〉や〈勤勉〉のイメージを付して課されたがゆえに、その外観のみが重視されるという逆転現象が近代には顕著になっていくのである。 *Vanity Fair* のヒロインで、アミーリアと対照的に狡猾なレベッカ (Rebecca/Mrs. Rawdon) が、縫物は貞淑な妻の表象であることを知りぬいてこれを利用する場面はその典型である。レベッカはつつましく貞節に (humble and virtuous) に見せたい時には必ず針箱から息子のシャツを取り出すが、シャツはいつまでも仕上げられることはない (425)。レベッカにとって縫物は、男性の傍らに座って「女らしさ」をアピールし、気をひく小道具にすぎないからである。

一方、*Adam Bede* のポイザー夫人やリズベスにとっては実用性を持っていた編物もまた、富裕層においては外観のみによるイメージづけの道具として用いられている。レベッカが家庭教師として住み込んだ家のクローリー夫人 (Lady Crawley) は、いつも編物 (knitting) をしている (69)。夫はバロネット (Baronet) であり、彼女は家庭と労働の場を行き来して采配をふるう必要も実用性の高い手仕事で家計を助ける必要もない。またその知恵もない。 “she had no sort of character, nor talents, nor opinions, nor occupations, nor amusements, nor that vigour of soul and ferocity of temper which often falls to the lot of entirely foolish women” と表され、娘たち

からさえ軽視されて、ふさぎこみながら日々を送るクローリー夫人は、だが、ウステッドの編物を昼も夜もやっている (73)。

フェヌロンが 17 世紀に既に看破していたように、「身分ある家庭の一員であるなら、かの女は手の労働からまぬかれてい」るにもかかわらず「なおはたらこうとするのは、なぜかは知らないが、はたらくことは女性にとって貞淑なことである、と言われているから」である² (13)。クローリー夫人の編物はまさにこの言葉をなぞっている。本来、実用品を作る必要のない彼女のような階級の女性にとっては、優雅で装飾性の高い刺繍やレース編みが似つかわしい。にもかかわらず毛糸編みをするクローリー夫人の姿からは、手仕事に意義を求めず、ただぼんやりとモラルの外観のみが身についている様子が強く浮かび上がってくるのである。

〈勤勉さ〉と〈貞淑さ〉のイメージづけは、未婚の女性であればより必要となる。アミーリアの義姉のミス・オズボーン (Miss Osborne) は、婚期を逃し、家で権威を振るう父の用事をこなしながら日々を過している。台所を見まわったり使用人を叱ったりと、亡くなった母の代わりに家庭内の仕事を担う一方で、父や自分の名刺を訪問先に置いて廻ったり居間で客を待ったり、社交も果たす。未婚の女性は母と家庭内の仕事を分担して請け負うのが常であったが、母のいない家庭では〈主婦〉の役割は全面的に娘にあてがわれた。このような〈家庭の娘 (ホーム・ドーター)〉たちは、女主人の役割のほか、家事、弟妹の家庭教師役、看護の仕事まで果たすことが期待された一方で、法的、経済的権利を保持しつつ、社交の場で既婚女性と同様の力を持つことができた (河村・今井 46)。彼女たちはそのために却って家に縛り付けられることとなり、婚期を逃してゆくことになった。父権のもとで家庭を管理しながらも自らの名前を名刺に入れて社交訪問をしているミス・オズボーンはまさにこの〈家庭の娘〉に当てはまる。

未婚女性として口うるさい世間の目にさらされる彼女たちにとって、家庭を守り健全に暮らしているイメージを保つことは重要なことであった。ここにやはり手仕事が登場する。17 世紀頃から未婚の婦人を指すようになった

スピンスター (spinster) という語のスピン (spin) とは「糸を紡ぐ」という意味であり、もともと「紡ぎ女」を指す。このことは糸紡ぎが、そして糸紡ぎの延長上にある編物や縫物が、如何に未婚の女性たちに大きな意味を持っていたかを示している。

ミス・オズボーンにもまた編物が習慣化されており、その様子は“working at a huge piece of worsted by the fire, on the sofa, hard by the great Iphigenia clock, which ticked and tolled with mournful loudness in the dreary room” (411) と書かれる³。しかし彼女にとって編物は、有能な〈家庭の娘〉なら持っているであろう、家事をうまく切り回そうとする自覚と結びつくものではない。経済的な不安のないミス・オズボーンにとって、漠然とでも手を動かすという動作自体が重要となる。編物は〈従順〉の美德とピューリタンの〈時は金なり〉の実践に最も適している。この外観は、婚期を逃した未婚の女性につきまとう不安定さや、彼女たちの〈貞潔〉に対する世間の疑心を取り払う効果を持ち得たのである。

小説の描き出す手仕事の情景は、真に勤勉で貞淑な女性たちの日常ばかりではない。むしろ無能な女に習慣づけられた仕草として描かれる。とりわけ中産富裕層の女性たちにとっては、ぼんやりと考えたりふさぎこんだりする時の手遊びでさえある。手仕事はモラルの実践をアピールできる仕草、実際はそうでなくとも家庭の中でのよき女性像の外観を保てる仕草として、近代には大きな意味を持っていたと言えよう。

4. ブルジョワジーの手仕事—恋とおしゃべり—

実用品・日用品を生み出し貞節と勤勉を体現するために女性の仕事とされる縫物や毛糸編みに対して、美しさや優雅さゆえに女性の仕事とされるのが刺繍や飾り編みなどの手芸である。美に細やかに感覚を働かせ、家と家族を趣味よく美しく飾り調えることはヴィクトリア朝時代の女性に期待されていた役割であり、手芸はこれ进行かなえる。しかしお金と暇のある家の女性でなければ手にする余裕がない手仕事であることは言うまでもないだろう。

ロジカ・パーカーとグリゼルダ・ポロックは、刺繍は女王、王妃もたしなんだことから独特の地位を得ており、貴族との結びつきゆえに階級の高さの完璧な証し、男が暇のある妻を養う能力を備えていることの確かな証拠であったと述べる(100)。そして刺繍がこうした地位を得ていたことは、その後階級の誇示に刺繍を利用する傾向を生んだ(99)。中産階級の女性たちは、刺繍を始めとする手芸一般をステイタスシンボルとして身に着け始めるのである。

ビートン夫妻によって1852年に創刊された *Englishwoman's Domestic Magazine* は、ミドルクラスの主婦のための雑誌で、家庭生活全般に関してエッセイからレシピまで多様な記事が載せられている。無論、手仕事に関するものも多いが、ここに紹介されている針仕事(needlework)とは刺繍(embroidery)やアップリケ(applique)、ビーズ細工(bead work)であり、編物は毛糸編みではなく、鉤針編み(crochet)やカーテンやナプキンを装飾する netting や braiding である。すべて装飾のための手仕事であり、刺繍や鉤針編みの図案や、それらで装飾を施した子どもの靴や財布の作り方が載せられている。このことから中産階級の女性の手仕事として手芸が奨励されていることがわかるであろう。

年頃の娘を持つ親たちにとって、娘に手芸を習わせ階級を誇示することは、よい結婚相手を見つけるために重要なことであった。今は子どものために一心に縫物をするしかないアミーリアも、娘の頃は近所にリボンを買うに行くにもお供がついてくるほどに甘やかされ大切に育てられていた。恋人と語りあったり、モスリンの襟に刺繍をしたりして過ごしていればよかったのである(“who is occupied in billing and cooing, or working muslin collars in Russell Square”(158))。商人の父が娘に刺繍を持たせているのは、それに見合う結婚相手を見つけるため、あるいはようやく見つけた裕福な相手に自分たちが見合う階級であることを誇示するために他ならない。夫を亡くした後に貧窮し、家計を助けるために何かできないかと考えた彼女が思いついたのが手芸(fine work)や絵を描くことだったのも、これらを女塾で学んでい

たからである。

エリオットの *Middlemarch* (1872) に登場するヴィンシー家 (Vincys) は古くからの工場主 (manufacturer) で、三代続く間に上流階級 (genteel) と姻戚関係もできている。ヴィンシー氏は宿屋 (innkeeper) の娘を妻にしたが、この結婚は財産を増やしている (96)。ヴィンシー家には、中産階級における地位の安定 (= 土地資本) と財産の確保 (= 商業資本) の駆け引きを含む結婚のあり方が典型的に現れている。彼は、たしなみある女性に必要なことをすべて授けてくれる女塾 (where the teaching included all that was demanded in the accomplished female) で、娘のロザモンド (Rosamond) を学ばせている。女塾を修了して結婚相手を物色しているロザモンドは常に刺繍やタッチング (tattooing) をしており、「たしなみ」にはそれらが含まれていたことが明らかとなる。

ロザモンドは工場主の娘、宿屋の孫娘であることを嫌い、ミドルマーチの野暮ったい男たちではなくよそから来た男性 (stranger)、できればバロネットくらいの階級の男性との結婚を夢見ている。この夢は、女塾で身に着けた「たしなみ」と自負に支えられている。

She had been at school with girls of higher position, whose brothers, she felt sure, it would have been possible for her to be more interested in, than in these inevitable Middlemarch companion. (97)

やがてロザモンドは理想にぴったりの医師リドゲイト (Lydgate) に恋をする。

Mr Lydgate suddenly corresponding to her ideal, being altogether foreign to Middlemarch, carrying a certain air of distinction congruous with good family, and possessing connections which offered vistas of that middle-class heaven, rank; (118)

実際にはリドゲイトは貧しく、由緒ある大学を卒業した医師の主流からはずれた開業医にすぎないのだが、リドゲイトの風貌と家柄に関する噂はロザモンドの結婚の夢を掻き立てるのにじゅうぶんであった。一方リドゲイトもロザモンドに「完璧な女らしさ」(perfect womanhood)見て妻にしたいと願う。リドゲイトの考える「女らしさ」は、“who would create order in the home and accounts with still magic, yet keep her fingers ready to touch the lute and transform life into romance at any moment”と書かれる(352)。ロザモンドの刺繍する姿はリドゲイトに、自らの手で家を心地よく飾ろうとする節儉の精神と、洗練された趣味や優美さからくる豊かさ、すなわち中産階級の理想の主婦像である〈家庭の天使〉を想起させたと言えよう。

ロザモンドが膝に広げた刺繍を見ながらじっと考えているのは恋の相手である。いよいよ結婚が決まると、バロネットを訪問することになる花嫁として上等の刺繍や高級レース(the very highest style of embroidery and Valenciennes)のついているハンカチーフを用意することで頭がいっぱいになる(354)。貞節と勤労モラルを象徴してきた手仕事は、女性に恋の楽しみをもたらすものとなっている。そればかりか、このようなイメージが付されたがゆえに却って男性を安心して近付け、おしゃべりさえも許す手段となり得た。

同じくエリオットの作品である *The Mill on the Floss* (1860) では、刺繍に手を動かすルーシー・ディーン(Lusy Deane)の足元でスティーヴン・ゲスト(Stephen Guest)が寝転んで鋏を玩んでいる。スティーヴンが指輪や薔薇の香油をつけ昼間からぶらぶらしていることは“the graceful and odoriferous result of the largest oil-mill and the most extensive wharf in St Ogg’s”(325)と表され、刺繍をする女性との釣り合いがほのめかされているが、彼が鋏を玩ぶ仕草にはあるもくろみ(design)が隠されている。鋏が必要だというルーシーにスティーヴンは言う。

The foolish scissors have slipped too far over the knuckles, it seems, and Hercules holds out his entrapped fingers hopelessly.

‘Confound the scissors! The oval lies the wrong way. Please, draw them off for me.’

‘Draw them off with your other hand,’ says Miss Lucy, roguishly.

‘O, but that’s my left hand: I’m not left-handed.’ Lucy laughs, and the scissors are drawn off with gentle touches from tiny tips, which naturally dispose Mr. Stephen for a repetition *da capo*. (325)

手芸は男性に女性を訪問したりおしゃべりしたりする恰好の機会を与えるばかりか、ここでは道具を介して触れ合う機会さえ与えている。〈貞節〉を象徴してきたはずの手仕事の道具が、男性との距離を近づける口実となっているのである。しかし観点を変えれば、手芸に〈貞節〉の象徴を引き継ぐ家庭モラルが付されていたからこそ、これが容認されたと言えるだろう。手仕事をしている限り、男性と二人きりになっても安全であるかのようなのである。こうして娘たちの恋は大胆になり、手仕事によって作り出された細工物は男性への贈り物とされるようになっている。

手仕事をもたらす恋や結婚にまつわる楽しみは、女性どうし手仕事の集まり（ビー (bee)）にも拡張される。誰かの結婚が決まれば集まって贈り物にするものを共同で作ったり、また慈善活動のための品物を作ったりした。ビーの本当の楽しみはおしゃべりをすることにあり、ゴシップの場ともなっている。*Middlemarch* でも醜聞が起きると、女たちが手仕事を持って集まる様子が描かれる。

The business was felt to be so public and important that it required dinners to feed it, and many invitations were just then issued and accepted on the strength of this scandal concerning Bulstrode and Lydgate; wives, widows, and single ladies took their work and went

out to tea oftener than usual; (719)

ビーの内実はゴシップの場であっても、手仕事を持ち寄っていることによって安らぎの家庭を作るという同じ目的を持つ女性どうし、情報を交換し合い互いに高め合うことを口実に掲げることができた。中産階級の娘や主婦たちは家庭モラルに縛られていたが、その一方でそのモラルを象徴する手仕事が彼女たちに楽しみを与えていたと言えよう。

中産階級の人々にとって、手芸はステイタスシンボルであると同時に家庭モラルの表象であった。糸紡ぎや毛糸編みの延長上にある手仕事として貞節さや勤労モラルの意味を根底に含んでいたからこそ、女性の仕事として位置づけられてきたはずであった。しかし手にしている本人にその自覚は見られない。ステイタスと結婚を象徴する手芸からは宗教モラルは脱色されているのである。

5. おわりに

中産階級の手仕事における宗教モラルは、装飾への興味や消費文化の発達によってますます色を薄めていくこととなる。宗教色が薄まり消費文化の発達した中産階級の社会モラルへと移行する様子を見るには、ジェーン・オースティン (Jane Austen) の手紙が恰好の資料となるであろう。牧師の娘であった彼女の手紙は、服飾品の購入について頻繁に言及されている。「レースの行商人がほんの二、三日前にやってきました。こんなに早く来るなんて、あなたと私にとってなんと不運な！」⁴、「注文していたケープが届きましたこれがレースの模様です。」「帽子に花を飾るのがとても流行っていて、それ以上に、果物を飾るのが流行っています。」⁵などと、姉への手紙に買った物や流行について楽しげに記している。オースティンにとっては手仕事もまた、「来週いよいよ帽子の手術を行ないます。あの帽子には私の幸せがかかっていますから。」⁶ というように、社交界での成功の鍵となるものなのである⁷。

本稿では 19 世紀のイギリス小説に描かれた女性の手仕事を、モラルに照らし合わせて振り返ってきた。手仕事は家庭内のみの仕事ではなく、労働階級の女性の仕事としても重要な意味を持っている。実はそうしたお針娘たちにもやはり、家庭の主婦たちに求められたものとは全く異なるものであったが「女性らしさ」が求められていた。これについては改めて考察したい。

注

- 1 姫岡とし子氏は『ジェンダー化する社会—労働とアイデンティティの日独比較史』（岩波書店、2004）において、近代化の中の織物業の担い手が男性中心であるドイツと、圧倒的に女性が多数である日本を比較し、ジェンダー別の労働分担が「本能的」に「自然」によって決定されると見なす言説に疑問を呈している。
- 2 ヴィーヴェスもまた「（糸紡ぎ）の仕事に従事し、多忙であることは分別のある貞淑な妻の徴であった」と記している（60）。
- 3 “Iphigenia”とはギリシャ神話に登場するミュケナイ王アガメムノンの娘で、父王の犠牲となったことから、ミス・オズボーンの隠喩として使用されている。
- 4 ジェイン・オースティン書簡（キャサンドラ・オースティン宛 1798.10.27-28）（新井潤美編訳『ジェーン・オースティンの手紙』（岩波文庫、2004））p. 49
- 5 同書、キャサンドラ・オースティン宛 1799.6.2、p. 114
- 6 同書、キャサンドラ・オースティン宛 1798.10.27-28、p. 46
- 7 オースティン自身、アイルランド人のトム・ルフロイと恋に落ちて舞踏会で「はしたない限りの行動」を尽くすものの（同書、キャサンドラ・オースティン宛 1796.1.9-10、p. 22）、弁護士として出世するべきトムに財産もない牧師の娘は不釣り合いであると周囲から反対され、結婚に至らなかったという経験をしている。また「アールと奥さんはポーツマスで想像を絶するほどつましい生活をしていて、使用人さえ雇っていないとか。こんな状況で結婚するなんて、彼女はよほど美德にこだわる性分なのね。」（同書、キャサンドラ・オースティン宛 1798.10.27-28、pp. 49-50）などと、結婚と金銭の関係にも度々言及している。

引用文献

- Beeton, Isabella Mary. *The Englishwoman's Domestic Magazine: the reprint of the Mid-Victorian Ladies Journal, 1852-56*. Osaka: Eureka Press. 2005.
- Eliot, George. *Adam Bede*. Ed. Carol A. Martin. Oxford: Oxford University Press. 2001.
- Eliot, George. *Middlemarch*. London: Penguin 1994.
- Eliot, George. *The Mill on the Floss*. Wordsworth Editions. 1995.
- Thackeray, William Makepeace. *Vanity Fair*. London: Penguin 1994.
- Vives, Juan Luis. *The Education of a Christian Woman: A Sixteenth-Century Manual*. Ed. and Trans. Charles Fantazzi. Chicago: The University of Chicago press. 2000.

Weber, Max. The Protestant Ethic and the spirit of Capitalism. London: Routledge. 2003.

新井潤美編訳『ジェーン・オースティンの手紙』(岩波文庫, 2004)

河村貞枝+今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』(青木書店, 2006)

『聖書』「箴言」第三章(日本聖書協会, 1989)

セジウィック, イヴ・K・著, 上原早苗, 亀澤美由紀訳『男同士の絆』(名古屋大学出版会, 2001)

パーカー, ロジカ, ボロック, グリゼルダ著, 萩原弘子訳『女・アート・イデオロギー』(1992, 新水社)

姫岡とし子氏『ジェンダー化する社会-労働とアイデンティティの日独比較史』(岩波書店, 2004)

フェスロン著, 志村鏡一郎訳『女子教育論』(梅根悟・勝田守一監修『世界教育学選集 11』(明治図書出版, 1960) 所収)

前野みち子・香川由紀子「西欧女性の手仕事モラルと明治日本におけるその受容」『言語文化論集』第 XXIX 巻 第 1 号(名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 2007)

キーワード

手仕事、女性、貞節、ステイタスシンボル、イギリス小説